

3) 在来希少種の保全に関する調査研究

岡 慎一郎¹・山崎 啓²・芦田裕史³・笹井隆秀^{1,2}

キーワード：生物多様性 希少種 外来種 種の保全

1. はじめに

生物多様性の高い琉球列島は、生物相が形成されており、希少種なども多く含まれる。これら希少種には絶滅の危機にあるものも少なくない。また、在来生態系の脅威となる外来種が定着しやすい環境的地盤もあり、その影響は深刻化している。当事業では、在来希少種に関する生態調査に基づく保全策の策定、外来種問題への対応に関する調査研究・技術開発により、琉球列島における生物多様性の保全に資する。

2. 在来希少種の保全に関する研究

沖縄の陸水域に生息する純淡水魚（一生を淡水域で過ごす魚）はわずか6種であり、いずれも絶滅の危機が指摘されている。令和4年度は、これら希少淡水魚のうち、ヒョウモンドジョウ（県指定希少野生動物；写真1）の飼育下の繁殖に成功した。

また、WWF ジャパンや日本魚類学会との連携事業として、石垣島の希少淡水魚の生息域外保全に関する技術開発を行い、本年度は固有亜種イシガキパイヌキバラヨシノボリの飼育下繁殖に成功した。さらに、石垣島では長らく確認されていないヒョウモンドジョウの存在を確かめるための環境DNAプロトコルの開発に着手した。



写真-1 沖縄固有種のヒョウモンドジョウ

3. 海洋博公園内の希少種調査

海洋博公園内に生息する希少種であり陸棲最大の甲殻類でもあるヤシガニの生態モニタリング調査を平成18年度から継続している。本年度はトレイルカメラでの継続監視による調査（写真-2）を実施し、約80万枚の映像記録を取得した。今後、数年間のデータ蓄積を予定しており、これらから本種の行動様式を解析する



写真-2 ヤシガニの行動観察に使用したトレイルカメラ

平成27年度から継続の園内の希少種クロイワトカゲモドキ（写真-3）の生息状況の調査も引き続き行った。昨年度に続いて飼育下繁殖に成功しており、飼育技術の向上により昨年度を上回る生残率を記録した。

また、海洋博公園内に設置した人工シェルター（隠れ場所）の利用実態調査においては、追跡2年目において全てのシェルターにおける利用の確認と、一部については長期間利用されていることが個体識別技術により判明、人工シェルターの代替生息環境としての有効性が確認された。



写真-3 飼育下にて繁殖したクロイワトカゲモドキ

4. 外来種問題への対応

海洋博公園内で繁殖するウシガエルについて、昨年度までに駆除が完遂していない熱帯ドリームセンターとおもろ植物園での駆除作業を行った。その結果、成体約 50 匹、幼生約 500 匹の駆除を実施した(写真-4)。

また、海洋博公園の人工池に生息する外来魚カワスズメ（通称ティラピア）についても駆除作業を実施し、約 1500 匹を捕獲した。



写真-4 ウシガエル駆除用のトラップ

5. 外部評価委員会コメント

ヒョウモンドジョウの繁殖は評価できる。また、クロイワトカゲモドキはどんどん数が減っているのので、それを残すための環境要因を探索してほしい。

(亀崎顧問：岡山理科大学教授)